

## 歯周病患者に対するインプラント治療

### —咬合性外傷をともなう広範型中等度～重度慢性歯周炎患者への治療から—

伊藤 公一

日本大学特任教授

## 講演抄録

インプラント治療は予知性の高い治療法ではあるが、保存か抜歯かの境界線上の歯周病罹患歯にインプラント治療を適応する場合は、個々の症例において慎重に評価すべきである。予後の疑わしい歯については、その原因となっている因子を除去する努力が必要であるが、長期的、または全顎的な予後を考慮して、診断を下さなければならない。しかし、歯周病罹患歯の抜歯やその後のインプラント治療の適応に対する厳密な基準が存在しないことから、患者と十分なインフォームドコンセントにより総合的、かつ個別に判断することが重要である。

本講演では、日本大学歯学部附属歯科病院歯周病科で 1993 年～1995 年の間に実施された Steri-Oss Implant System の臨床治験症例の 1 例を紹介する。

患者は 65 歳男性、高血圧症を有し、大多数の歯に歯冠修復・補綴処置がなされており、左上にはサファイアインプラントを使用したブリッジが、下顎にはコーヌスデンチャーが装着されている。臼歯部咬合高径の低下により上顎前歯部の正中離開を認め、審美および発音障害のある患者である。咬合性外傷をともなう広範型中等度～重度慢性歯周炎と診断し、破壊された歯周組織、審美・発音障害ならびに咬合機能の回復を歯周基本治療、歯周外科治療およびインプラント治療を含む咬合機能回復治療により獲得した。

長期的な予後が疑問視された 15 はフラップ手術後の 9 年目に、16 および 17 は 13 年目に抜歯され、インプラント治療によって対処した。その他の残存歯は、歯冠歯根比の大なる 14 および 22 も含めて臨床治験終了後 16 年間良好に経過した。下顎に埋入した Steri-Oss インプラントについては上部構造を装着してから 15-16 年、左上臼歯部に埋入した Astra Tech インプラントについては 14 年間、および右上臼歯部に埋入したと Steri-Oss と Astra Tech インプラントは 3-7 年間良好に経過した。

歯周病患者にインプラント治療を含む歯周治療を適切に行うことで、予後が疑問視された以外の残存歯の歯周病の進行が停止し、獲得した歯およびインプラントの健康状態、咬合・発音機能ならびに審美を長期にわたって維持することが可能であった。